

大井の玄元

大松川郷

八

一鄉二里，邑人

大井のうぶ元

大松川郷

里長并同

○郡邑託云山内村支郷別郎里印物名唱云と見え
此大松川の枝邑あり高根子霜焼落合下村向松河上松川田
福萬赤水外山赤倉祖^{オホカ}父箇^カ基一郷坂板谷平志^{イソヤ}此土村
た^タ祖^{オホカ}父^カ基^カ一郷坂板屋比良此三村と今廢村その有りし
跡の字のこを傳ふといふ

○高根子邑

○高根子村享保郡邑託云家負二軒と見え今ハ三平と云家一
戸のこ萬治のありまハ三郎右衛門と云家^{ヤド}有りおた九郎
兵衛野と云あり人栖家なり跡^{フモト}何^{スミ}れと云高根子と
云つる山の山脚^{フモト}住居有^{スミ}ちる地^{トコロ}なり此を以て村の名な之

○落合邑

○此村と黒沢河北沢目川の兩瀬落合の流れる村の所と成
る落合村に成橋のりまた新峠の踏やる成橋を渡り此兩
の成橋掛りの此新峠に矢向峠白木峠とて此山内三峠に
り其一つの峠之落合の家負新古十二戸に

○霜焼野邑

○此山里に地震を富物不毛なるやある初霜にと早く豊に
なりたるやありし霜深ければ不熟なる意もて霜焼の名あり家新古二戸

○向松川邑

○向松川を下村のりしるやむ此邑家負古二十軒今十八戸に
春日明神社あり斎主五郎左衛門之此神社の前より新峠に

登る道ありはみちがけと横手へ出る近路なれば人々此山踏をして
大沼の内なる沼山村より一里行けば横手と云ふと云ふ

○下邑

○下村と上松川の内之村に土橋あり下村より上松川邑へ渡り
不動明王堂北沢目川の南岸に西北に向て建り仁右衛門是を斎
主の村の家あり古九軒今十一戸に

○上松川邑

○山神社下村の山に地心なり斎主 重右衛門
此上松川と田代邑の間の奥の隅に中て火火峠と云ふ高のありおとし
て此山の麓に鬼火焼く事ありあるあり鬼を捕へて火を焚て
燃らしその霊火今も燃えたりと云ふ物語あり五十六年

大山祇社此山と云ふところの山に在りて大藤の三本の桂木を
夢に曳纏ひ生り五月のちう咲盛之古本より云々葉少花のこもるゝ咲
てたふが、ちう見ゆのちうとて、りり増田のちうの大藤久保田の椎古
山の聖徳太子殿の大藤もいふやまゝりたる大藤之此神社前を在
方北に分れハみちのくの南部路より増田の郷左草村を去るに在り
北方より外山村より行て御獄の神山に登る道にありて此山なる
字を大城林と云ふありの柵戸の跡をいふなり
○はうまゝと云ふといふふ福前の村に在りて東に中りて在りて北
を大城林と云ふ高山の九曲をよちたるをいふ水飲と云ふ
あり此清水を以て黒沼勘重郎文化元年を創り百八町水田
新築ぬはうまゝと云ふ事、牧をいふありて地をいふありて

と云ふ思ふは、此の時ふ字よりあるのそと南部村のちうの山相
栗高桑々々時知も谷を焼巻某巻某巻といふをいふ多し
と云ふ事をいふ作、牧をいふ牧をいふ字よりある本の時よりいふ
此はうまゝと云ふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
保昌坊やいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
ト部大連氏致者塩湯彦余臣之氏致男氏尚り七代苗裔滿徳
長者致尚雄勝平鹿仙北をいふ作りの平鹿仙北西郡の堀吉沢村
沢の流を用い水と云ふ田畠を作て大家を造り宝藏棟を造る牛
馬雞犬多し養ひて富貴繁栄のちうなり地福長者の字より光真
人の男大島頼遠が四男其子保昌カ字より貝、沢三郎武通が次男
之此保昌出家して保昌坊房と号して諸山を修行して紅別といふ熊野

那智山の参籠し觀音の示現を依て巡礼して三十三所の觀世音を大佛
師定朝と造らせ所屬梨教園を開眼供養の師として本國より勝
平鹿仙北河邊秋田山本六郎の山々獄々の寺院に此跡を安置して三
三所の順礼記を書き是を奉納す其後都より教教所屬梨此寺尋
祀果て保昌房教園もこの巡礼に御獄山塩湯彦神佛鎮座
の市山の湯峰、白鹿の觀世音を第一番と定めて秋田郡北内根井
岩本山の三十三番をせられし納めて教園所屬梨と歸高し
此教園所屬梨と伴勢國太守藤原孝息弟二十子六十五代
花山院御宇寛和元年乙酉歲八歳のとき慈惠大僧正の才子
とあり長曆二年寅年大僧正となり七十代後冷泉院ノ永承二年
六月十日七十歳にて入寂せり

教園唯識論を誦して春日明神の加護を蒙り右師ありて
真澄考し教園所屬梨の事ハ今昔物語及元亨釈書等に見えたり
○承暦二年地福長者致尚の跡を追て巡礼せり七十三代堀河院
寛治三年己三月十七日致昌天狗に誘引て行方を知れ其弟
正致翌年庚子の春當山將軍三郎清原武衡同四郎家衡
乱を起して兵戰時滅亡し保昌房ノ系圖如是なりと見えたり
此保昌卷と保昌家との後庵とありてその權現なり
地と熊野權現や斎奉りしその地なりとあり此寺を福方と
し福方として地福長者満徳長者の古跡なり地福の福満徳
の跡を二合て福方とありし今も福方と時を卷と作るなり
とて假字ありとせり此福方とありし地とありしなり

御獄神泉の末の流をいはいし人といふおひ口廻て水が
汚れたるに堀水のあも赤水と作て村をもさぬ山奥にたふお
う巻の雪を板巻の清水泥底の水木ののほゆる流る水のみな赤
川を流てまた北原目河の森合の箴橋のり家ありと八軒今大戸
あり上志戸下志戸といふあり大志度の内へ此志戸ふ事ありと
さるや山本郡志度橋といふ村ありとさる志戸河志戸
の浦よりいふさるや沼長根といふあり此西より父大井といふ字
ありまたさるや霞方といふありさるといふ事保日記に祖父と父と作を
偶俗といふありさるといふ大井といふ大泉ありといふ家といふ多かり
いふさるやさるといふまた住つてさる近き元文寛保の年まで家
二戸ありといふ古免の山賊の話をさるに傳を録し平鹿郡山川大井

邑知とある記大井と其流大なりて今も沼長根の石河其祖父と
さる邑知といふ跡ありといふの郷に真木といふありといふ續記に
羽田大室駅といふ雄勝郡雄醜骨山といふ雄勝の今大室長崎の
名のいふといふといふこと偶あり此大井と祖父とさる地動より
山脈といふといふといふ野山といふ大井といふ邑知といふ
みちのくの江刺郡大井河此いづの河邊に邑知ありまた石見
国子邑知郡その外もありさるは是平鹿郡の古跡ありといふ
がまの奥の古沼ありといふ蜘蛛すみのその蜘蛛の跡周回といふ
見られ三尺斗といふ見ゆと長さといふやまた二三尋の巨蛇
といふ多かりといふ古免といふ見し人ありといふ人の話ありといふ
大井子上沼下沼とて大なる水沼ありと下沼とみえ田とありて

谷地眼とていりく深く涌出泉六尺の厚てその残り上流
と南北八十間斗東西三十間斗泉をききおほぬ所あり
館々沃といふある古館の蹟ありとて誰に任りしとて外
の跡とおぼしむ沃といふかゝるく小城の跡あるとて
黒沼のりたりなる夜蚊居坂といふ要害の地とてあ
此古沼の水と外山の流と外山村の南なる鳥屋林のあたりにて
落合あり

○外山邑

○溪底に家屋ありとて立ち谷水流を神とて山に奥
赤倉といふ村あり赤水河より並み外山村と稱ふなり三梨左
膳とて神樂男ありまた仙北郡金沢圓徳寺の末庵とて一向宗派

の徳山といふ僧侶住居り外山村家負三十三戸赤倉村家六戸
外山赤倉の村と鳥谷林雀倉をどり下つ方を雲と南に中
て四本鉤栗山岩倉権現の溪大滝高き落をことのあらた鷹
沢山の麓にありなり
○大山祇社あり此社に周囲四尋をりの大七葉樹ありて神社の
うしろ斗く此樹木大枝ありて朽折たる空樹に此うしろの蛇
すみて身と頭とをぬき人の語ふは山獄に登る鹿の山口あり
御嶽の山跡に鉢森細捕山といふとて北良槻假字は槻と作る
此左の方と湯の峠ありとて此真下温泉といふ湯の跡あり
つとて十二回の九折をのりねばやとて神樂の杉群とてまた橋手
路と本道ありて石所八少女やとて神樂男の居處と久保野目神女

茅隱^{ヤシキ}座の林あり古瀬渡板戸渡と大鷄居山丸山平等道明沃野
 鳴見沃下辰三社古真木長根綱取越^{ツナトリ}一瀧山道地獄谷滑りヶ沢
 行者第^{ヤシキ}を登るといつりまた地震^{十午}より崩^{ユギモ}二山を獄々
 岨^{サカサガ}山道いづれ一つあふみいづくに陥りたりとおもわれ
 たり絶嶺なりて四方八方を眺むると東は大聖山北土堤森安^{ドテモリ}
 莖赤倉山ニッ森遠弦高^{トホツル}山岩倉権現山東南の方ハ
 笹峠^{シホウノケ}栗鈎栗山大倉山小倉山小松川山白木峠田代山七曲山
 水堀間垣峠管^{リカ}臺鳴神八方三ッ森弓投^{ユナケ}森真南の方子茂竹^{ミチタケ}
 山柴倉山^{大谷新町}大森山中内山^{御運上山あり大屋村}てんやを山雄勝平鹿
 両郡境山あり遠輪長根^{雄勝郡の吉野村あり}小安山^{平鹿郡あり}黒瀧山二段五
 枚比良金山^{昔一日五大割五枚を此山より出りたる}桂峠高平山切止峠黒森^{雄勝郡界あり}

外^カ同^{サシ}
名あり
凍氷山^{東南正中}
雪の方々と黒^水盛山^{外山より金沢へ谷地長根}
越^{平鹿北の郡に}
萱森山落し小^{大沢の界}薊峠^{横手踏}下小^イ楢森北の方と雄鹿の
りり袴腰山々新山本山は踰る花折山の境之寒風山
あたの石^ハ妻恋山琴の湖^{八就湖}をゆく琴川のくく凍る神宮嶽
保呂羽の御獄月山鳥海嶽遠くの境雄魄骨山や黄
蘗^{イリ}嶽北に遠きみちのくの岩手山また姫ヶ嶽近き秋田の杜^{モリ}
良^{ヨシ}岳蛇峰^{ヲロギネ}太平山うへに連山如波濤といふかゝる有るの
ささいふち下のあり雲々なみりあるの遠方を四手にわた
けのつや高くしてかてい坂前近く登ぶるといふ事をしてなぬ
身ルぎよまゝと御幣^{ミヌナヒ}手^{タテマケ}奈ぬおひの神垣に杉群の中は棟
高くなり立ちあり白松よこたへあびる神さびたる御嶽^{ミツタケ}之恐る^{カレコ}

此おほい山は平鹿郡に二柱たて給ふ式内のおほい神塩湯彦余
とまをり奉る塩湯彦の氣化の神の神に塩土、公祠を奉奉
とてつるす、即嶽は三嶺あり、三嶺あり、其一嶺は天八衢大神
一嶺は大汝貴余一嶺は小彦名余とせり、さるやん、もと
て三嶽ともいふをすとも、誤り、す、此神は七釜とて、鹹温泉涌
出、地あり、今と山は崩埋て湯濤の有るふともあり、はえねと
まづ、くる七竈といひ、湯畔とふ処ありし、此方、くを温泉嶺と
いふと、う、登る白湫の觀世音を湯峰とて、みちのくの塩竈明
神も、そのつゝ、塩竈七ツあり、か、一ツは釜火手の浦に沈み、一ツは
釜浦に存、今、一ツは某地あり、とに残りて、四ツあり、その中、乾の隅、
釜を即、某の釜といふ、そのやゑを、とて、此志、旧がまの浦、田う、一浦が

女々うなふ田唄、塩釜、古い七口釜をく、三口いり、二口の志に、
 まゝと三十一言をうたふ、此神山も今も温泉、釜でふもの、
 ね湯峰、おのち七口釜の石、残れ、海遠、
 生、処いとく、多、近、秋田郡、切石村の七折山の麓、嫁々沢の邊、
 鹹井あり、遠く、美濃国、月吉日吉の近、源三位頼政卿の知、
 行所、猪、早太、生産、地こそ、頼政建立の神社あり、此、
 杜の前、塩の干満、井あり、甲斐国、夢山、近、老河の山、
 磯、あすち、と、あ、今、塩山、
 谷、郡、塩湯あり、遠江、掛、肆近、
 式、御神の内、
 神同、丹羽、郡、塩道、神出羽、神門、郡、塩沼、神塩沼、北、神塩沼、北、古麻田、

主水道政大和八沃木村宮川宅兵馬（九）養子道信三型遠江道（十）繼在膳
當代司官吉光、小太刀其外上祖より傳ふ古物也

○瀧の石ありと

○瀑布（タキ）の石ありと多々あり赤倉の八洲（ヤス）作りの瀧あり大なりと瀧の向山
を白元（シラハタ）とふとあり天狗すめりとふ市山（ミタケ）の東に中り大倉沢のさうどが
流猿倉、流南に向いて四五丈落る飛泉あり黒滝赤滝、小倉の枝
沢に在り大沢の飛泉ありといふ所もよき瀧ありみず勢ふに在りて
山賤ありて臨見するや、いふぬよしとあり

○石の石ありと

○祖父石祖母石此二石は福萬邑東北に中りて久多石といふ所なり
祖母石高二丈四尺斗石周囲二十五尋斗といふ所の石を祖

母石といふといふ石は唐櫃石是れおちり方角の會洞といふ
在り高八尺周囲四尋斗り之甚うはつらふ似たり錢神石田代と
福万との間に在り高四尺斗めり之尋斗の石

○石の石ありと

○鳥屋（トヤ）林のおちつ子松ちやねのさん子土堤杜のありと此安貝利子
と雄勝郡の杉宮の元道田稻荷社のつららの外よりありと
とよ北狐といふとあり

○黒澤氏家譜

○出羽国平鹿郡大谷莊横手郷浅倉城主小野寺遠江守義
道公、家臣黒沢和泉文祿四年、正月元旦御慶賀、息甚八郎
を召連れ登城、式禮終りて甚八郎を近く招て君より言上して

云々此小童と愚臣が子とてさうふたうなれど乱世とてさうふたう之臣が
存命も旦暮とてさうふたういふ臣も討死するさうなり
此後成長の後似合ふ事奉公せし作たまひて臣が代も思
給ひて召しつゝのたまふ事をも申上れは君近う御事され
歳いづつある某とてなづね給ふともいふて和泉に申上る
此童子事と天正十六年^{ウマ}に出生て童名は甚八郎と申上
れは君作給ふ始子の對面なり稚子も能く聞けし忠を
尽し父母に孝を尽すし忠孝の道を守りまう馬の家は生る
身は幼稚のときより手習学問を怠る事なく成長の後武道
をえしとし文武両道の轍の如く翼を似たり文徳内に存く
武威外に備ふるさういふかたは良臣の名を傳へや愚昧とて

父祖の名を穢す事なれ汝が父は一方の将として教度の血戦の
軍忠を顯し家名を奉たし汝も成人して左京亮に忠を励め
忠臣の兵も成長せむ事を賀し汝を改め忠兵衛と名けて名
乗義道、道を給へ道家と名乗り市並下し給へ甚八郎
市並を頂戴す時、黒鞆の小太刀一腰取よせ給ひて是初て
見参の引出物を得さしめし近うあるものたふさうも甚八郎
席近く進み伺候す君作は此太刀は備前、祐定が作とて近
所の討物之具を汝と興ふし此太刀も高名をあり父が面を
悦ばせし甚八郎は給へ甚八郎謹て拝受し奉り高名を
父子とも身に餘す喜び下城し一家酒宴を催し甚八郎名
を改め忠兵衛道家と唱へ父子とも萬歳の事を祈りし

北条時義ありや同年十月十日雄勝郡岩崎合戦父和
泉討死し母も悲歎の積りや病臥し慶長二
丁酉五月七日に死す忠兵衛道家孤子とあり同苗甚兵
衛の許に仕ぬ然る太閤秀吉公薨り給ひて天下の政道家
康公の歸し即政務として慶長四年大谷刑部少輔吉継
を羽列へ下し吉継先達て代官を遣りて義道の領内を視
せめ法令を正く行ふべきを却て無禮不儀を成すを惡みて
義道の家臣より吉継の代官を誅す是金以て義道公の知
分ふ知るあり悲哉市家の廢亡すへき端相吉継
大に憤り義道を討むと諸国軍を催し來て義道一族油
利の押たる大森の康道が居城を攻め斬りし軍

角より雄雄を決せし康道情思惟れ和を乞ふた敵
陣へ書を贈つて云く抑此乱を起す非他代官を誅せし依
過也改罰給ふ之條陳し其由をいふ家臣も其の仕事
依て義道が心よりあへ金り對し府公逆意を不存所天の
照覧を仰む過を被免於市解陣何時か旁恩を謝
むと云ふに申送れば吉継如何思ひし十月下旬に歸陣
し依て慶長六年に言異し殺る家康公より條々の
市不審とて義道公遠流の罪を蒙る石見に配流せし市一
族諸徒と改易也市嫡子道光公戸沢盛政の許に介抱を
得給ふ偕同苗甚兵衛君に隨ひ配處に赴きぬ依て道家三
立寄所十四歳を浪人となり知行所の因に寧ろ平鹿郡大

谷村隠居し名を改めて惣左衛門と号す云々 佐竹義重公秋
田の市領主と成りて給ひて市嫡子義宣公慶長七^{壬午}年九月
九日市入国おかくて道家大谷村に居たりといふ住居
意に任せて慶長十一年奥州へ立越へ同国和賀郡多老
といふ處に農士とありて住り道家力業を好て常に石を以
て力を鍛へ一時道家鹿狼の処へ行當や狼人熊を追ひ来
て手負の熊に疾く逃給へといふ道家是を見ざるかの熊飛々如
く来て道家を咀食しとて道家熊の手を取て数丈高き川岸
より一石振りて投落す熊は四足折て死す此強勢を感じて時
の人異名を呼ぶ熊惣左衛門と号す叔父主君義道公の市行
方を尋るる程多く所をたて逃去し給ふ甚兵衛市遺骨

を拾て高野山に納め出羽より下りて徘徊せしを 義重公甚兵
衛をのり出され臣とし給ふ此由を聞けし幸なり羽州に
立歸り時節よりいかに甚兵衛に附て 義重公は奉公
を願ひと思ひ慶長十一年より元和六年申年まで十五年間
居住せし多老を去り羽州 平鹿郡 大松川、内福萬と
いふ處に移住す思沢道家三十歳子息美濃九歳のやとく
同九年亥年居宅火災にて記録家財等悉く焼亡し父子と
も帶刀を失せしものなり道家三十六歳美濃十二歳の時く
此火災に依て旦暮の経営不如意となりて光陰を送るは
寛永三^{丙寅}年道家四十二歳よりて中風、症を成り行步不自
由の身と成りぬ嗚呼時ちるは此故に奉公願ふを断るなり

かゝる民間に落ちて美濃、右を勘十郎道弘と改めぬ
老々元和年中の火災に焼亡して先祖の姓名解り
かなしといふも唯予し知少より行状古卷の物語を聞て
書集めて子孫に傳ふ道弘年十九歳于時寛永七年
初秋吉日道弘奉父之命記之後代是より莫為
亡失

○黑澤氏系図

金風抄此系譜後
人偽作と疑
甚兵衛道家興子
道廣共仕佐竹氏
慶長十七年大坂之役
父子共従軍道廣
寛永十七年死す江
戸
又據此云う甚兵衛

○黒沢和泉 和泉小野寺義道公、家臣文禄四年山崎合戦
討死す子息道家八歳之年如記録先祖之姓名失故和泉
系図に記さる

○惣左衛門尉道家 天正十六年生、童名甚八郎

道家ミレテ此道
家トイハル記也甚
兵衛道家ト此云
和泉惣左衛門ト混
スハカラス

○勘十郎道弘 慶長十七年生、童名美濃元和六年九歳

より父と共福属村へ来、後改名号勘十郎

○惣左衛門尉道政 ○惣左衛門道景 ○武右衛門道定

○勘十郎道信 ○七郎兵衛道晴 ○久米五郎道明

○當代及九代勘重郎道頼委曲省略、記之

○家藏

○小野寺義道黒沢甚八郎八歳ノの時ノ賜与横刀二尺ノ寸銘

永禄十年八月日 備列長船祐定作

大松川御福萬邑

保昌時とて保昌彦が
旧刹の蹟よりとらふ

二品



此甕凡如圖
高二寸五分



飯匙のやうな
凡大サ如圖
石弩
たぐひく

黒沢勘平郎家藏
平鹿郡大森城
主小野寺孫五郎
康道詠歌真筆
真筆
色紙金雲菊流
形之

雨後

虫

康道

虫

虫

梢

夕風

花

虫

虫

る

大松川郷
霜焼野邑
家二戸

雨 風 雲 霧 雪 霜 露 雨 風 雲 霧 雪 霜 露

大松川郷 其二

霜焼野邑

家二戸

あゝ処よりとちやく

秋霜よりて

たなつより

のほらさる

よ

ふい始

る

と

い



大松川郷 其二

薊峠アサノ古薊内峠ふすまや
 秋田郡アキタ浅見内ありあきみない
 蝦夷語を文字よりつゝたるこ
 浅見内アサノ浅見内アサノみなあきみない
 浅見といふも夷語轉化く
 内ハ沢といふ夷語に

浅見峠
 踰口アサノ石地藏大士を
 安置せり手酌の神の
 さしこ



大松川郷 其三

甲 落合邑
乙 黒沃川
丙 北沢目川
二のひらみおろし
サ刺峠丁く



大松川郷
其四

甲 御嶽山

塩湯彦
市神鏡

座

乙 湯野花山

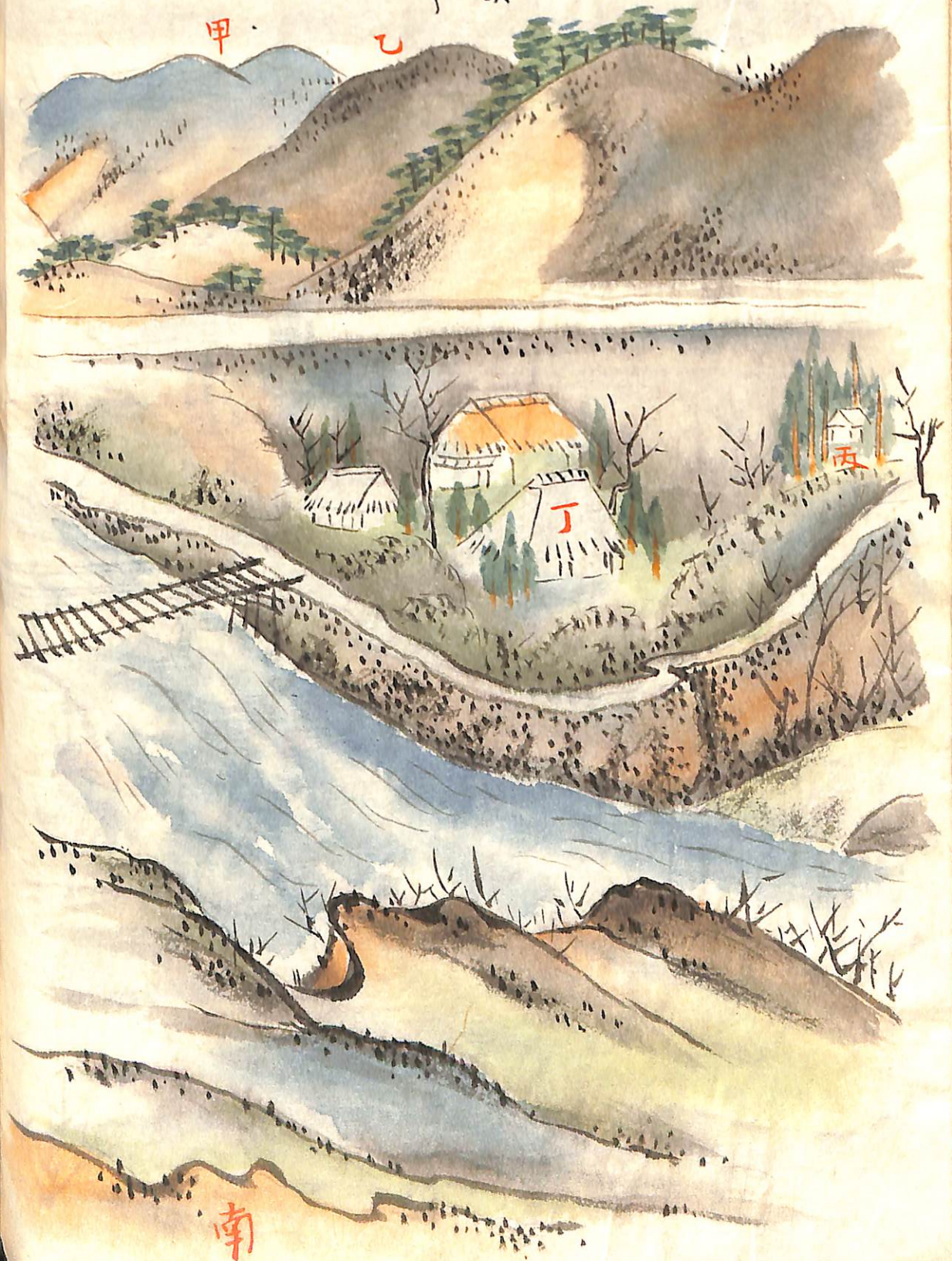
いづゝ温泉
涌しよきを
いづ

丙 山神社

丁 下邑

戊 向松川邑

北



大松川 其五

小倉沢

甲 経塚森 乙 上尉

丙 賀天 丁 薬師森

戊 下尉 己 山神社

庚 前掛峠

辛 重富門家



此河より遠山の

眺あり

経塚薬師森

矢作峠

中よりあふく



大松川 其六

田代

甲 火揚峠

乙 天狗沢



甲

此鬼火のやう

春身は夜毎に

此やう事

秋はをりとし

冬は雪の上より

小松川のあたり

よく見ゆと

なほ本行

つたふ



大松川郷 其七
 田代邑 赤水
 福高と

東



大松川郷 其八
 福萬
 澱の橋
 甲 小倉沢
 乙 薬師嶽



名はおお淀の橋
 乙 似たりと
 澱橋と云
 此橋の長り五五同耳
 丁 此直二同耳



大松川郷 其八
 乙
 甲
 丁

大松川傳 其九
福萬

甲 黒沼
 丙 笹森山
 丁 草倉山
 乙 男沼
 戊 要害坂
 己 階子田
 庚 九田



黒沼の形凡うみ
 似たり廣五百五
 十間五十五間斗り
 黒沼を雄沼といふ
 雄沼にまて少しきり
 女沼に氷れとも男沼に
 凍るに黒沼に蛭と井守
 のもろくさいと魚を
 黒沼に河やも物語
 阿本行とつたか
 まうと



大松川郷 其十
福萬

甲 福万清水
乙 要害坂

里人説いて
夜蚊居坂と
矢竹のふりうか
多かる処之

多かる処之



黒沢台より要害坂
外子沢を過ぎて静坂
といふあり清水坂あり
奥の入りみづを
しづとらふといふ
此福万清水の味甜く
大洋の練母丸の如く
世にちりおこるといふ
かたあつ妙美井く
さうなれと岨より
の点滴をて下井
のことく芳野の
とく砂井
すなほ灰
ある泉



大松川郷 其十一
福萬邑

むかし地福長者といふ
所其末子萬徳長者と
いふ人あり地福の福と方徳
の徳とをとりて福万といふ
その萬徳長者保昌といふ
保昌といふ此跡あり今
保昌郷と稱ふを呼ぶ
そこに行き甲此橋を渡
りて乙いあづむのこも
九曲を登れいと云
委曲本行
在



マツナカネ
丙松長山領
丁木箴木林

北つこもり
本名女神山
仙北郡と南部堺
在る高み



大松川郷 其十二

甲 福萬邑

乙 山神社

丙 大蔓又藤

此二藤古亦て
葉少子花あとも
夕夕夕夕桂三本
に在ひ纏ひたりまた
大ある桂の丁根あり
此桂を山神と云り
たゝか桂倒れたる後
今の神社を建てりて



大松川郷 其十三

袖山 外山と此地名奥羽

和名抄

平鹿郡

山川 大井 邑知と見えなり

福万邑より山一里斗り行きて

大井とふ山の字ありまたそこ

おしき祖父ヶ台といふ処あり

いふくゝ家多しなる地あり

地動子ゆり埋れしところあり

埋人そのを穴山といふ



田

郡邑記に祖父ヶ台家貞二軒と

享保元文寛保の頃二三戸の家あり

つるも享保日記に祖父ヶ台といふ

かならんを此あたりの人祖父ヶ台

と唱ふ是和名抄の邑知と見え

大井に今上と云ふ湖のことと見え

ありて大小の蟒蛇こゝろすみ下泥

いたくあせて谷地と云ふ谷地眼と

いさゝの水いと深くして残りぬり

大井の里あり

山川にいつこゝも知れぬ此山内は山河

のこの村とてみおかしをわたり往復す

さりねれあゝをりて山川に庄と

いふといふ



大松川郷 其十四
袖山

甲 古柵跡
乙 外堀跡
丙 遠弦あがね



東

某あゝ人の居城や
かゝる古館の跡
四木福美をまどの
ところろろる在る
夜蚊居坂のむら

要害坂あり

車いち
ろし

甲

乙

北

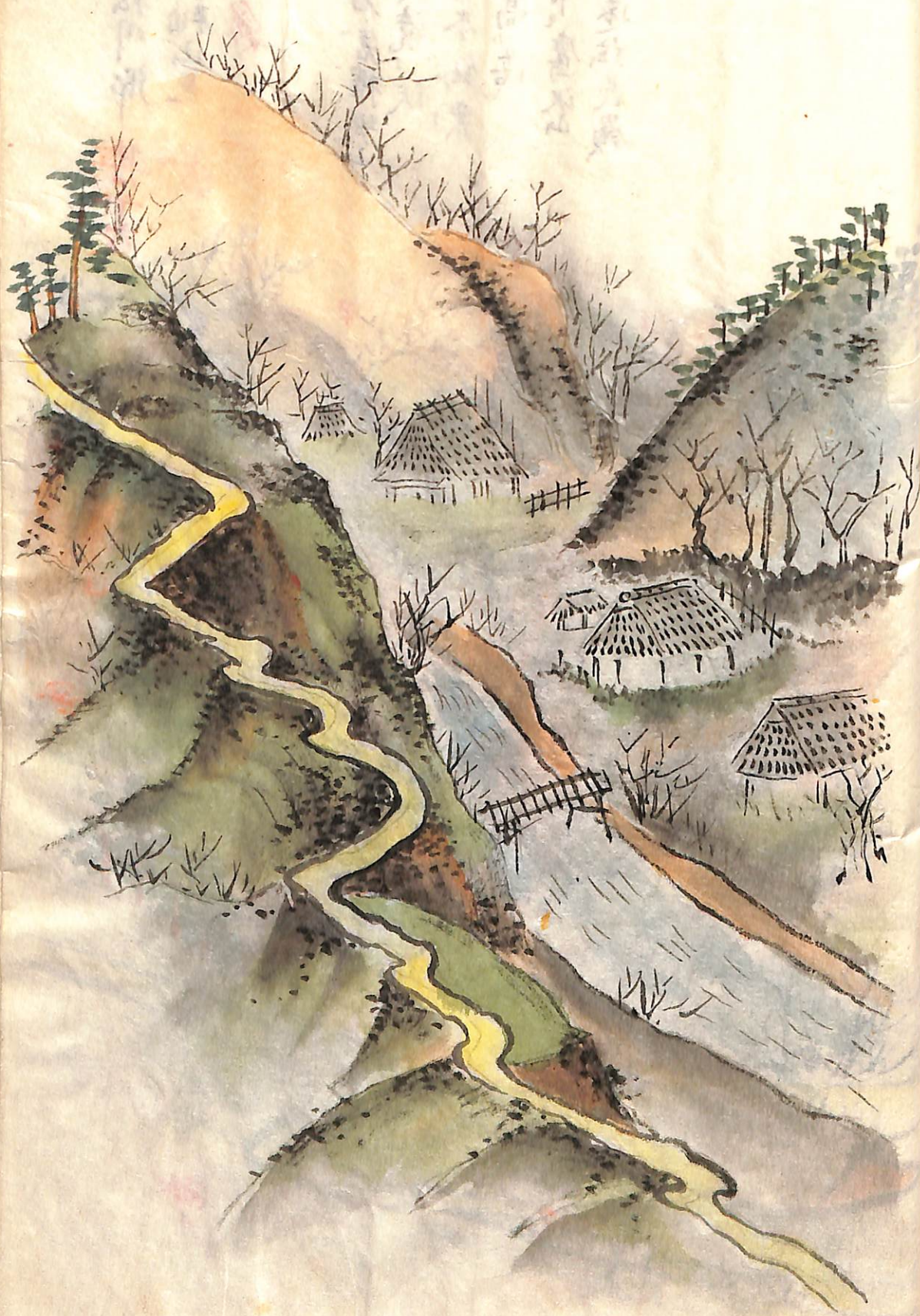
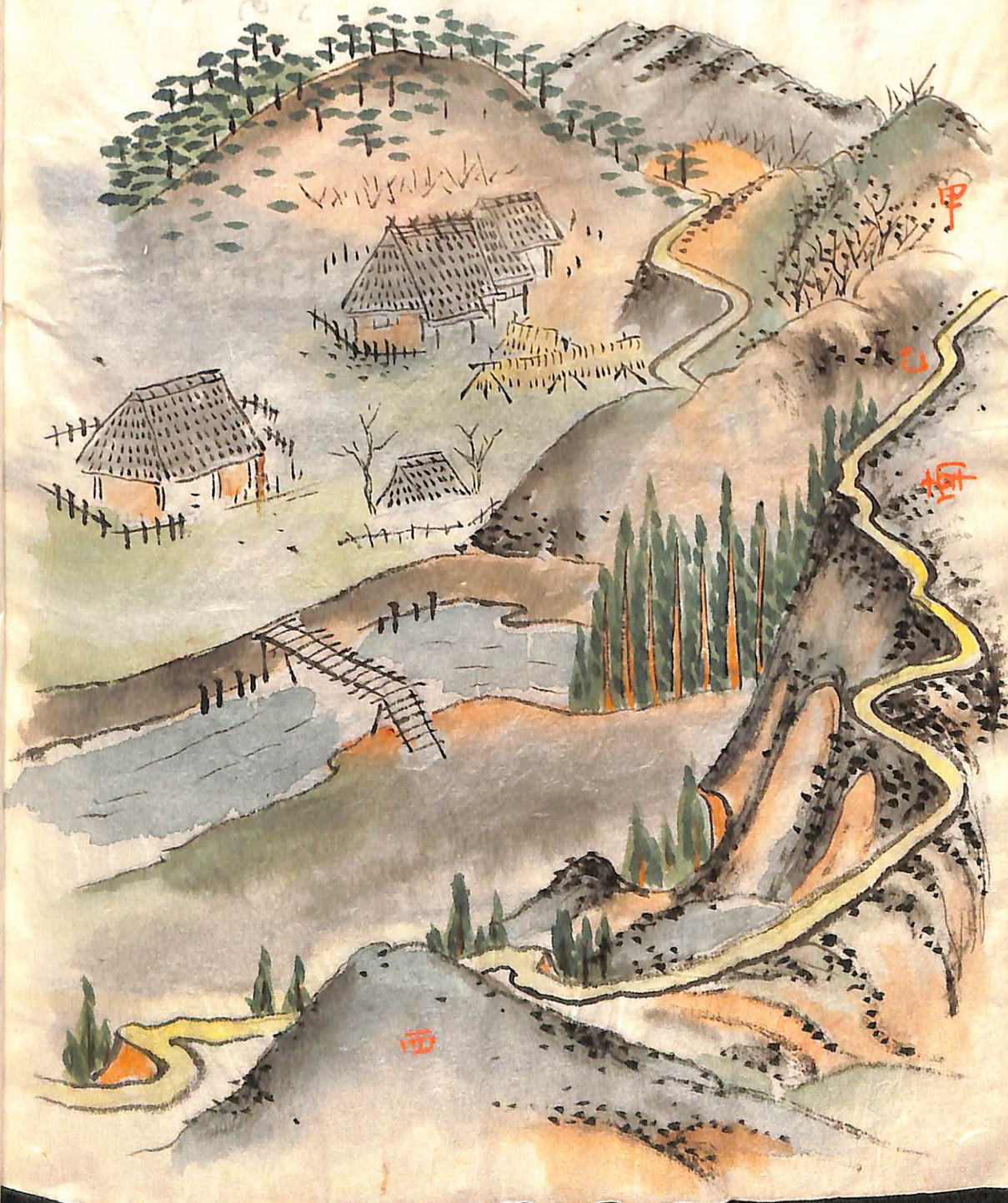


大松川 其十五
袖山邑

甲 鳥屋赤林

乙 雀倉

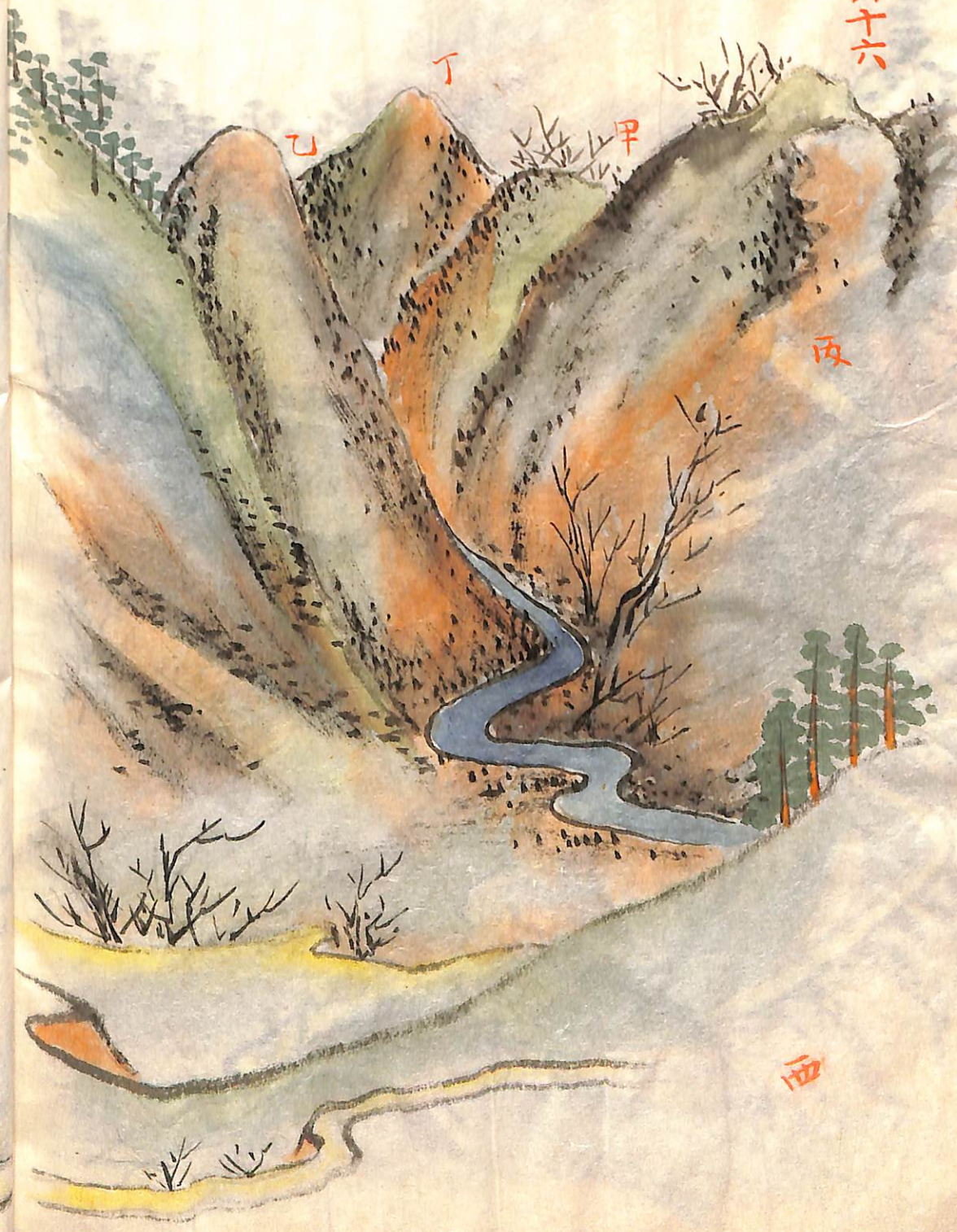
大松川
其十五
袖山邑
甲 鳥屋赤林
乙 雀倉
丙 山崎
丁 山崎
戊 山崎
己 山崎
庚 山崎
辛 山崎
壬 山崎
癸 山崎



大松川郷 其十六

袖山邑

甲 岩倉権現山
乙 大澆ノ伏
丙 四本鉤栗
丁 高ノ落
戊 下鷹沢山
己 遠弦長嶺



大松川郷 其十六

大松川郷 其六十七
袖山邑

甲 七ッ釜今ハ谷地眼の如ク一ツ残りの
大場台の谷地と云ふや一ツ七ッの
湯泉ありて其温湯みか
濁しよしを付ふ涌壺を
わこ八釜といふ方またある
れて炭焼三膝太か七ッの炭
産立て炭やきしなといふ
そことあるなりあるなり
よしのあむしほがまに七ッ
今ハ此等本行まつた
乙 湯の畔峠と見えぬ
丙 西きわた山丁此ありの赤林
の陰に板屋平うとて村あり
か天明三四年より人あり今
ハ家ありあかハ大足所とい
世の中さいかかりけるまろ
家五軒いたえりや袖山



の赤糸より通ふ道
馬を林沢といふ

戊 女神嶽また木蔵
嵩といふ仙北郡南部
堺の高山よりく嶺沼
ある筈山之
己 真真嶽
庚 陸奥和賀郡
在る山なりあが嶽といふ
辛 みちのく岩手山より
廿俗岩手の文と云れて岩
鷲山といふ
七ッ釜といふ湯のたな味と
いひかりこころ事なかり
塩湯彦の市神の神号
そ知られたる



大松川郷 其十八

御嶽

甲 塩湯彦神社

乙 火焚舎長床之

丙 横手道

丁 山内道



大松川郷 其十八
御嶽
甲 塩湯彦神社
乙 火焚舎長床之
丙 横手道
丁 山内道



大和川郷 其十九

御嶽の市手洗の

甲 寒泉をみたふし坂より

臨むあふみのし

丙 保呂羽山

丁 神宮寺嶽

戊 黒木林山

己 八千長峰

庚 長床

副川神社 羽宇志別神社

塩湯彦神社 一目子おろ

かみ奉る事またあや

たと市山あり

戊

庚

乙

甲

己

丁

丙



大松川郷 其二十止

御嶽北麓
袖山邑

甲山神社
乙七葉樹

榎木

穴木
巨蛇



袖のうら

丹波開邑

九止

袖のうら

○丹波開邑

九止

里正 並同

○むろ 丹波といふ浮浪人開きも多し及今丹波邑といふ古
名と古間水といふ^{フルマキ}地^よに牧をいありよりうさなをを東
に落し山とて大嶽あり横手より丹波より丹波村より大松
川より入る道なり

○山神社 祭日四月十二日十二月十二日 齋主 助八

此神社の所なりを堂々沢といひ大尺沢大正林山あり杉沢境あり
大豊沢大郎坂ありおなら沢水山澤袖浦北澤沢をどうち
續ち山里へ

○
山内脱漏

山内の茂村あたの小杉川邑をシとの山陰に在る卵の如き石或手
 毬マリの如くある蹴鞠ウエマリの如き石を打碎ウツキて見れば其内子蛤ソナナカいたや貝
 蓋カサネとあるれあるは雄勝伊若畑村の山奥秋田郡勝手社の
 奥金壺山にも貝石ありまた其外にも産するまた海までもわたり
 甲斐玉鶴郡の黒地山と富士の麓へあるも貝石あり近く南部
 の浪打峠にもあるの貝出るしく海の変化をわいて
 黒沢村の奥右衛門の家子大幅の曼荼羅を家藏シカム長六尺幅四尺
 五寸二月十五日七月七日十二月十五日とせし三度掛て具ツカを拝礼マシす
 七月七日と南部の澤内を始の隣りの人とらむをわがみ奉るとて
 うち群れをなるとまゐり身て賑はうさむの絹マタリを金縫ミタテたて

一ありきなりいづくの年経たしん黒くすいづてそれと見りくゞる
阿ねど弥陀經の曼荼羅マニボサナや佛菩薩ミカホの面想七重欄楯七重羅網七
重行樹カキをとの筆すさびせかつぶちんけりしなりこゝ人墨徴をとり
羅と雄勝郡岩井川村の奥山三ッ森峠とて仙臺南部秋田の三領
の地境を以モリ三本林の形を以て此山領イナリ高小して四時雪のふりく
見やるとさう慈舟寺とてわう佛刹なりとふいつのころなりと
寺ヤミヤナ山賊の入りて住僧ホフシ小法師とるさしころ財宝を捕ホり去とり
其寺の閑居ホフシ和尙此平鹿郡黒沢邑に在れり老り寺の曼陀羅をば
いぬ寺に残りたる佛具等もさうに取納め置たりが今此家子傳ふ
兵亂のころ閑庵イホリに焼亡峰の古寺にやけたりといふ今その佛具經

梅宗元香和尙の松
原村補陀洛寺鼻
祖月泉長印和尙
嗣法をうけしもの
寺の志見えたり

典位牌等此氏家ヤドに傳ふ法華經の卷末に奉寄進大乘妙典元
龜五年甲四月四日心陽坊正覺寺策代と傳元龜五年乙未に
元龜四年子天正と改元てそれなりと傳ふ其寺を八年
号改ナカたるルなりと傳ふ今また一卷の末に「天正七年
卯月八日今司東原」とある有り慈舟寺デラを自然オノツカに傳ふや
や野火をとりやれしなりと傳ふ今其礎をその世のまに
苔むたりと傳ふあり慈舟寺に陸奥江刺郡黒石郷
念花山正法寺の僧侶すみつゝとて此平鹿郡増田村の満福寺
の開祖梅宗元香をうけしをいつやと傳ふしつゝとて事からすたら
みとて傳ふなりと

田代村代々島田源助とて旧家あり此氏家子猿酒とてふものを

造^{カミ}して^ウ之^ノ上^ニ腹^ハの病^ヲを^シて^ハ何^レと^テ此^ノ島^ノ田^ノ上^ニ祖^トと^テ伴^ハ勢^カ國^ヲ
来^キる人^ヲを^シ創^シと^シ山^ノ北^ニ金^ノ沢^ニ居^ミ住^ミて家^ノ衡^ヲを^シ仕^メあ^ル人^ノ云^フ猿^ノ酒^ヲと^シ金^ノ沢^ノ
城^ノ主^ノ家^ノ衡^ノカ^ノ家^ノ方^ヲを^シ実^カ又^カ請^カ牟^カ武^ノ則^ニ代^ニ狛^ノ猴^ノ三^ノ頭^ヲを^シ捕^リて^ハ皮^ヲと^シ筋^ヲ骨^ヲ
と^シを^シ去^リ膳^ヲと^シ背^ノ肉^ヲを^シ寒^ノ水^ヲを^シひ^キた^リ事^ヲ三^ノ十^ノ日^ヲか^ツて^ハ日^ヲ乾^シ一^ノ美^ノ酒^ヲ
漬^ケまた^ハ六^ノ月^ノの火^ヲ天^ノ乾^シか^ツて^ハ後^ニ塩^ノ水^ヲを^シひ^キて^ハ甕^ニを^シぬ^テ蓋^ヲを^シし^テ
三^ノ年^ヲを^シ経^テ一^ノ盃^ヲ飲^ミば^ハた^ニ塩^ノと^シ水^ヲを^シ一^ノ杯^ヲ入^レ一^ノ合^ヲ汲^リば^ハた^ニ前^ノの^ノや^ノ塩^ノと^シ
水^ヲを^シ入^レこ^ノち^ニり^テ後^ニと^シ千^ノ歳^ヲを^シ経^テも^シつ^ツや^ノ事^ヲや^リ病^ヲの^ノ癒^ヲす^事
また^ハち^ニり^テ藥^ヲを^シり^テ後^ニ三^ノ年^ヲの^ノ流^ノ城^ノの^ノも^シ此^ノ狛^ノ猴^ノ酒^ノの^ノ甕^ヲを^シ持^テ去^リて^ハ
山^ノ内^ノの^ノ田^ノ代^ノ邑^ノを^シ身^ヲを^シま^ニた^ク避^ケて^ハ其^ノ代^ヲと^シ家^ノの^ノ鞍^ノ鍮^ヲを^シも^シ持^テり^テ
菩提^ノ寺^ヲを^シれ^ハ金^ノ沢^ノの^ノ祇^ノ園^ノ寺^ヲ林^ノに^ニ寄^リ附^セし^テを^シり^テ
○筏^ノ村^ノの^ノ三^ノ十^ノ番^ノ神^ノの^ノ前^ヲを^シり^テ烟^ノの^ノ雪^ノカ^ノ上^ニ子^ヲ除^リ夜^ヲ更^ニて^ハ大^ノ松^ノ明^ノの^ノ式^ヲを^シり^テ

そ^レに^ハ麻^ノ板^ヲを^シい^テつ^ツに^ハ其^ノ形^ヲ筆^ヲの^ノ如^ク大^ニ作^リて^ハ十^ノ一^ノ節^ノの^ノ結^ヲ目^ヲ
り^テこ^ノを^シ二^ノ本^ヲ作^リて^ハ上^ニ筏^ノ下^ニ筏^ヲを^シ進^メて^ハそ^ノの^ノ火^ノの^ノか^ツを^シ見^テ一^ノ
と^シせ^メあ^ルい^ハまた^ハち^ニり^テと^シそ^ノの^ノた^ヲあ^ル夜^ヲ明^レば^ハ去^リ年^ヲ来^キ
初^ノ聲^ヲ集^メ三^ノ十^ノ番^ノ神^ノ廣^ノ之^ノ前^ニの^ノ雪^ノ踏^ヲを^シり^テ相^ノ撲^ヲあ^ル是^ノレ^ノ筏^ノの^ノ
上^下と^シ方^ヲを^シり^テち^ニり^テ此^ノ勝^ノ負^ヲを^シ見^テ一^ノと^シせ^メあ^ルり^テを^シ知^ルる^事
あ^ル神^ノ官^ノ神^ノ前^ニて^ハ油^ノ餅^ヲと^シ大^ニ作^リ備^ヲ餅^ヲは^ハ吳^ノ桃^ノの^ノ油^ヲを^シぬ^テて^ハそ^ノの^ノ
火^ヲを^シ附^テも^シや^リ是^ノレ^ノ元^ノ三^ノ日^ノ村^ノの^ノ家^ノ毎^ニ分^リを^シり^テ疫^ノ病^ヲを^シ避^ケり^テ
ち^ニり^テい^ハふ^事雄^ノ鹿^ノの^ノ本^ノ山^ノの^ノ正^ノ月^ノの^ノ油^ノ餅^ノの^ノ神^ノ事^ヲや^リ似^テ異^ナり^テ
ち^ニり^テ

後酒醸甕

甲乙周四三尺八寸五分 丙丁口口且七寸 戊己此高一尺八寸五分
色ハ世ミハあめいろちみし

此酒の瓶子すり

人まひめかくして一間の

くらみま置けり

此かたにそのあり

さま人の語り

たうを聞て

凡あかちん

とあらしたる

うへに清将軍

のせより付へこし

此のかそのまこと

しるべ



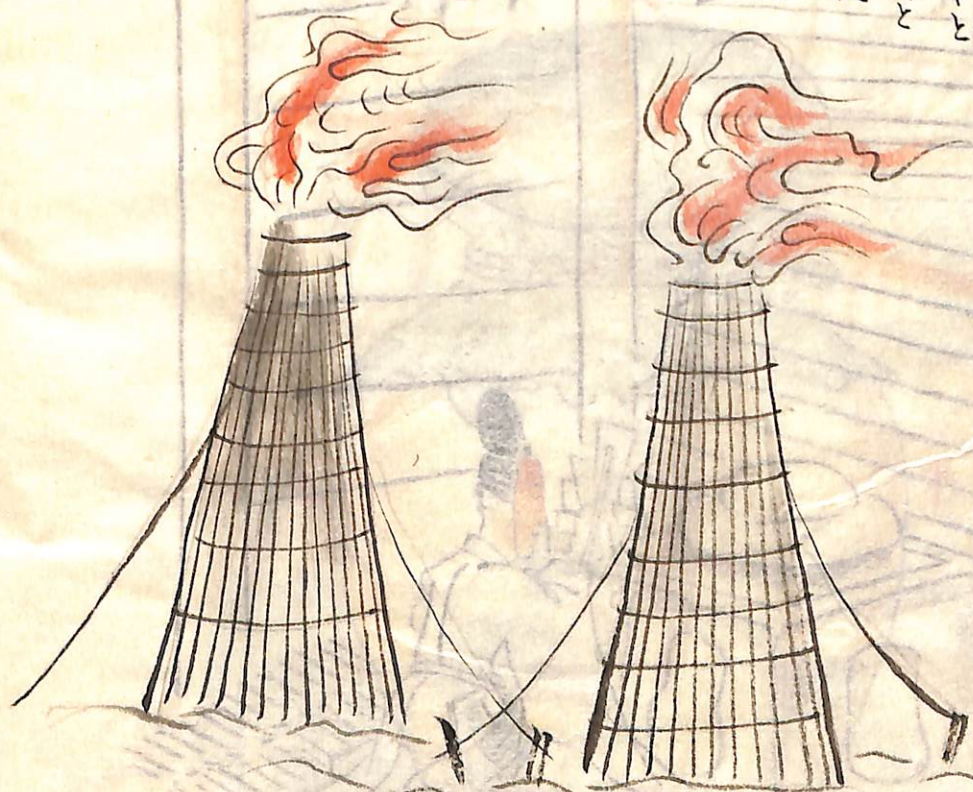
新井山田大蔵

身田新井山田大蔵

山内郷代村、鎮守
三十番神社
元三、日吳桃油餅
よ火をかくるハ餅食
の宿あふんか胡桃の
あふんあふんねと凡雄
底のあふん餅行事
みひとしらんか



トシヨ
 除夜は太松明を麻草柄して作り是を雪の
 上さきその松明は結目十二ありそのハ
 一とせよあふ此まつの火の色赤々と
 あふけたるを見また炭子あるかと
 所うふいて一とせの事あるれ
 かゆふとさとししためあり
 また麻柄と呉油の餅は古語
 拾遺に市歳のおほみ神の
 市心をなこしむ麻柄をて
 持て作り云々
 またすいだなるはじみ
 くるみあしと見えたる
 さりけれは疫を避のみ
 まへ市歳市神を祭るし
 古きもの残りたること
 あふ



松明一丈四五尺

歳旦、管色の世番神、みやとち
 大杉の前、初賀集りて
 雪踏みわたきて相撲あり

是れ上下の山村の
 人々もその
 かちまけを
 見て、お田の
 みのりよし
 あふ
 あふ
 ぶん



登	8054
函	442
番	11

昭和六年正月廿八日
 東京市神田区
 大塚町一丁目
 大塚町一丁目
 大塚町一丁目



昭和六年正月廿八日

